

食卓が

勉強机



吉村 幸代

くった。

故郷・安曇野へ仲間を誘い、農と食を楽しもう。居宅の周囲の水田では、自家用飯米の他に、酒米か餅米を1年交替で栽培することにした。

昨今、休耕地が気になる。近所の葡萄畑は、放置後たった1年を経て、春にはタンポポ、夏はヒメジョオンに覆わ

れた。夏はヒメジョオンに覆わ

変えている。そして、農業は割に合わない仕事だと、多くの人が口を揃える。

美酒は、酒粕もこれまた美味で、食卓を豊かに彩っている。

食料自給率40%（カロリーベース）の先進国・日本。諸説はあろうが、身近な休耕地の増加は、いずれ食糧に困窮する時がくるという不安を呼び寄せる。「土台が腐る」というが、農地が廃れていくこ

今年も餅米。もちもちクラブのメンバーの手で植えて刈り取り、はぎ掛けをした。完熟の見極めは難しい。青米を警戒していたら、残暑にあおられて胴割れを起こした。気を揉んだが、天日干しの新米・餅米は香り高く、甘味ふく

農業倶楽部「千歳屋」

安曇野の一角に、父が遺してくれた僅かな農地がある。先祖代々が営々と守り続け、一族の生命を育む農作物を産み出してきた大切な田畑だ。

「我らの食を、我らの手で」をスローガンに、4年前、農業倶楽部「千歳屋」を立ち上げた。「千歳屋」は美家の屋号、軽トラックを購入して車体に名前を入れた。かつては炭小屋だったという大正期の納屋を倶楽部ハウスに改装し、更衣室やトイレもつ

れる一面の荒地と化してしまった。作り手が高齢に達したか、体調でも崩したか、後継者はいないのか。夏草が枯れ倒れた後、朽ち始めた支柱に細々と絡みつく葡萄の黄色い葉。何とも、やるせない。

農業離れが進んでいると実感する。安曇野でも、オセロゲームの如く、農地がプレハブ工法の賃貸アパートに姿を

とは、この国の土台が衰退していくことに通じはしないか。割に合わない努力は切り捨ててしまふ無策の怠慢には、やがて天罰が下るだろう。

昨年、利き酒講座の仲間と手植えた酒米「ひとこち」は、この秋、オリジナル清酒「寿一番星」となった。無加圧袋吊るし製法で搾った

増の盛り上がりを見せた。明後日から師走。霜枯れた花々を刈り、枯葉を集め、冬野菜を漬け込む。小さな農地から大きな夢を広げたい。

（よしむら・さちよ、寿台公民館館長、主婦||松本市）

（よしむら・さちよ、寿台公民館館長、主婦||松本市）

リレーコラム